

2011年版 学長が新生に薦める100冊の本

～闘病と看護、生命と癒しの本から～

◆◆◆ 闘病、看護と介護 ◆◆◆

No.	書名	編著者名	一言コメント
1	飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ：若き医師が死の直前まで綴った愛の手記	井村 和清	不治の病に冒された青年医師の家族あて遺稿集。1980年代初頭のベストセラー。死の1カ月前まで働きつつ記した著者の言葉は今も心を打つ。
2	あなたも地域看護のフロントランナー：挑み続ける保健師から	望月 弘子、 宮崎 和加子	通称「保助看法」制定の年(1948)に保健師活動を始めた著者が、当時のわが国の社会と保健情勢とともに多様な活動を語った記録。今後の看護を考えるヒントが一杯。
3	逝かない身体：ALS的日常生活を生きる	川口 有美子	難病ALS(筋萎縮性側索硬化症)の母の在宅介護記録だが、単なる看病記でなく、生と死、人間が人間たるゆえんを考えさせられる。ちょっと重い。
4	1リットルの涙：難病と闘い続ける少女亜也の日記	木藤 亜也	全運動機能が喪失する難病の著者の闘病日記。10代の少女の揺れ動く心がありありと伝わってくる。表現、涙なしには読み進められない。
5	いのちを育む：おさなごに生きた人生の記録	三宅 廉	NHKプロジェクトXでも取り上げられたパルモア病院創設者三宅廉の信念のこもった医療活動記録。30年以上前にお目にかかり、何度か病院を訪問しました。
6	美しいままで：オランダで安楽死を選んだ日本女性の「心の日記」	ネーダーコー ルン靖子	著者は宗像市生まれ。がん発病後、自らの意志で安楽死を選び夫の国オランダで亡くなるまでの記。尊厳をもつての終末期、深く考えさせられる。
7	おい癒め酌みかはさうぜ秋の酒：江國滋闘病日記	江國 滋	「カーディガン、ナースはみんなやさしくて」。俳人で随筆家の壮絶な闘病記。ナースとの機知にとんだ対話も沢山記されている。句集「癒め」も読んで欲しい。
8	壁のない風景：ハンセン病を生きる	井上 佳子	ハンセン病療養所菊池恵楓園(熊本県)の10年を追ったルポルタージュ。社会的状況は変化したが、この病気への偏見や差別はまだある。読んで欲しい。
9	がん患者学<1>～<3>	柳原 和子	ノンフィクション作家のがん闘病記。長期生存者へのインタビューやがん医療専門家との対話など、まさにがん患者による「がん患者学」テキストでもある!!
10	看護を語ることの意味：“ナラティブ”に生きて	川島 みどり	現場で心に残ることを適正に語る<narrative>ことは看護の本質に通ずるという著者は究極の看護実践者。経験を他者に学んでもらうには普遍化言語化が必要です。
11	看護が直面する11のモラル・ジレンマ	小林 亜津子	今回の主題とは違うが、看護はきれいごとだけでないことを知ってほしい。臨床現場で直面するモラル・ジレンマ。医療側としてどう立ち向かうか、難問にも挑んで欲しい。
12	がんと闘った科学者の記録	戸塚 洋二、 立花 隆	健在ならノーベル賞確実と云われた物理学者戸塚洋二のがん闘病記。科学者の冷徹な眼による自分の病態分析も、立花隆との対話や解説も興味深い。
13	ガンに生かされて	飯島 夏樹	TV・映画放映された『Life 天国で君に逢えたら』の原作。がんを病むプロウインドサーファーの家族への想いを綴った手記。若くたくましい男性にも、ある日、死が来ることがある。
14	奇跡の脳	ジル・ボルト・ テイラー	脳卒中で左脳機能を喪失した37才の脳科学専門家。通常の認識知覚を失っている間の意識の変容と8年間のリハビリによる復活までの内省を記した本書は16と好一対。
15	献身：萩原タケの生涯	森 礼子	1896年三陸地震後の津波救援にも当った日赤看護界の大先輩、第1回ナインゲール記章受賞者。教育や国際的活動も含め、その生涯は看護のもつ力を彷彿させる。必読!
16	壊れた脳生存する知	山田 規畝子	高次脳機能障害を抱える外科医の手記。病を悲観せず、客観的に綴る。病気になったことを「科学する楽しさ」にすりかえた、との記述には感嘆する。
17	犠牲(サクリファイス)：わが息子・脳死の11日	柳田 邦男	著名なノンフィクション作家が、精神を病み、自死をはかって脳死状態になった息子の11日間を綴った記録。10期生が本学「知識の扉」お勧め本に取り上げている。
18	四十でがんになってから	岸本 葉子	40歳の一人暮らしの女性ががんになる。ごくありそうな話だが、日常生活はどう変わる? 食事は? 仕事は? ユーモアのある筆致で「がんのある日常」を綴ったエッセイ。
19	死とは何か：さて死んだのは誰なのか	池田 晶子/わた くし、つまりNob ody	「哲学エッセイ」ジャンルを確立した著者の47才の没後の新刊。死とは何か、私とは何か、平易な書き方だが、しばし哲学の世界に身を置くことができる。
20	死にゆく妻との旅路	清水 久典	余命いくばくもないがんの妻との壮絶にして温かい放浪の旅。常識的でないが、何かを感じさせる映画化された実話。作家高山文彦の前書きも良い。
21	終章を共に生きて：介護の現場から	石井 良一	高齢化に伴い、認知症も増えている。身体能力の低下よりも、知的尊厳をもって生涯を全うすることの尊さor難しさや介護、終の看取り、共生の観点から穏やかに描かれている。
22	精神科医がうつ病になった：ある精神科医のうつ病体験記	泉 基樹	高校時代、うつ病の友を亡くしたことから精神科医になったのに、自身も同病の身となる。見えない病気の苦しさ、周囲に支えられての回復の過程、ほっとしました。
23	世界のハンセン病がなくなる日：病気と差別への戦い	笹川 陽平	ハンセン病の制圧と偏見排除に活動する著者の記録。病気の歴史や差別の実態を知ることから、人間の尊厳についても考えさせられる。
24	大切な人をどう看取るのか：終末期医療とグリーフケア	信濃毎日新聞 社文化部	信濃毎日新聞の連載記事だが、患者と家族、医療介護関係者らの取材から、緩和ケア、在宅看取りなど現代の終末期医療をめぐる状況がよく判る。
25	ためらいの看護：臨床日誌から	西川 勝	多彩な看護師業の間に哲学を収めた著者の真に求められる看護への提言。相手のかすかな声と声なき声を聴き落とさぬために何が必要か考えて欲しい。
26	妻を看取る日：国立がんセンター名誉総長の喪失と再生の記録	垣添 忠生	がん医療の最高峰にいた著者による、妻のがん闘病、自宅での最期の看取り、喪失と深い悲嘆からの回復(グリーフケア)を記した書だが、医療と看護を深く考えさせる書。

No.	書名	編著者名	一言コメント
27	妻と最期の10日間	桃井 和馬	紛争地などで活躍する写真家による、くも膜下出血で倒れた妻の最後の10日間の看取り記録。妻との思い出と厳しい現実を綴っている。
28	手はいつ生えてくるの：手のない書家の回想	小畑 延子	5歳時、事故で両手を失った著者。中学入学前から始めた書道に励み、ソーシャルワーカーとしての勤務経験、画家との結婚などの回想記。本書装丁にある書は著者のもの。感激!
29	ナース：ガン病棟の記録	ペギー・アンダーソン	古典的がん看護記録。出版時(1978)の全米ベストセラー。淡々と描かれているが、再読しても胸に迫る。看護師の責務を理解するためにも、是非一読を。
30	ナースの生きがい<3> 国際保健医療協力の場で	志摩 チヨ江、 稲岡 光子	チョット古いのが、国際保健の先駆者たちの体験記の古典。異文化中で奮闘し、失敗する? 姿からも十分の学びがある。執筆者には本学大学院修士の生の一人在る。
31	脳梗塞からの“再生”：免疫学者・多田富雄の闘い	上田 真理子	脳梗塞で半身不随となった後も、能創作などを行う世界的免疫学者・多田富雄を追ったNHKディレクターの記。多田先生の『寡黙なる巨人』もお勧め。
32	母に歌う子守唄：わたしの介護日誌	落合 恵子	要介護度5の母との生活を記したエッセイ。著述業や講演で多忙な著者が、悲劇的になりがち介護をユーモアを交えて書いている。読後感は爽やか。
33	「平穩死」のすすめ：口から食べられなくなったらどうしますか	石飛 幸三	長年の外科医生活後、老人病院勤めを始めた著者が、過剰ともいえる医療で生かされているかのような老人たちが望んでいるのは平穩な死だという。
34	ぼくもあなたとおなじ人間です。：エイズと闘った小さな活動家、ンコシ少年の生涯	ジム・ウーテン	母の胎内でHIVに感染し、ホスピス経営する女性に育てられた南アフリカの少年を通じて、同国のエイズの実態と差別が語られる。絶句しながら読みました。
35	ママでなくてよかったよ：小児がんて逝った8歳-498日間の闘い	森下 純子	小児科医の頃、6才の白血病の坊やが死の1週間前、「ママ、オレみたいな弱い子産むな!」と云いました。部屋出てから、ご両親様と号泣しました。子どもは神さます。大人は?
36	認められぬ病：現代医療への根源的問い	柳澤 桂子	生命科学者で歌人の著者は、診断のつかない難病の経過中、「病気よりも医療界から受けた苦しみの方が大きい」との言葉をどう受け止めるか。
37	水俣胎児との約束：医師・板井八重子が受けとったいのちのメッセージ	矢吹 紀人	偶然、水俣で医療を始めた女性医師の診療と研究の記録。ある地方にたまたま発生した病気ではなく、人間を含む生物の再生を護る警告の書。
38	闇を光に：ハンセン病を生きて	近藤 宏一	11から80才までのハンセン病療養所暮らしの著者の随筆や詩。偏見と不自由な環境下のみずみずしい魂が紡いだ詩が神谷美恵子を触発したとされる。
39	リハビリの夜	熊谷 晋一郎	脳性まひの小児科医による自分の病態分析記だが、マヒは官能的であり、「あなたを道連れに転倒したい」とか、病気も悪くない?との思いが生まれる。
40	凜として看護	久松 シンノ、 川島 みどり	長崎で被爆後、師永井隆博士と看護に当たられた記録。後に「平和メッセジャー」活動家でもあり、ナイチンゲール記章ご授賞(2005)時にお目にかかりました。一昨年ご逝去。

◆◆◆ 生命と死、医療について ◆◆◆

No.	書名	編著者名	一言コメント
41	あなたの患者になりたい：患者の視点で語る医療コミュニケーション	佐伯 晴子	模擬患者として医学教育に関与する著者がコミュニケーション問題を取り上げたエッセイ。あなたは、難しい専門用語を誰にでも判り易く伝えられるか?
42	医者涙、患者涙	南淵 明宏	ブラック・ジャックのモデルの著者は私の大学の後輩の熱血漢心臓外科医。時に過激発言が物議をかますが、古風で鋭くケン担ぎのネコTシャツ着用を私はよく理解できる。
43	「いのち」とはなにか：生命科学への招待	柳澤 桂子	難病に苦しんだ故にでしょうか、著者は、生命現象は美しく素晴らしいと云う。私たちはそれをよく理解し生きる意味を考えねば。生命科学の基本が分り易く書かれている。
44	いのちの砂時計：終末期医療はいま	共同通信社社会部	延命か?安楽死か?厳しい判断が医師と家族にのしかかる。大切な人を看取った家族や医療従事者が経験したさまざまな「最期」と苦悩が綴られている。未来の経験ともいえる。
45	祈る心は、治る力	ラリー・ドゥシー	何かを強く願う時、誰もその成就を祈る。著者は祈りの効用を研究事例とともに紹介しつつ、現代医学にも祈りを生かすべきと述べる。あなたはどうか考える?
46	永遠の別れ：悲しみを癒す智慧の書	エリザベス・キューブラー・ロス、 デーヴィッド・ケスラー	有名な『死ぬ瞬間』の著者の最終作。災害による喪失体験、一本の木になぞらえた人間のトラウマからの回復力、生きる力などなど、今、必読かも。
47	HIV マリコの場合	安部 結貴	はずみでHIV感染しハワイで「闇」人生を送るマリコを偶然知ったフリーライターのドキュメンタリー。普通の若い女性が闘病を通じて確立してゆく人間ドラマとも云える。
48	オスカー：天国への旅立ちを知らせる猫	デイヴィッド・ドーサ	老人病院に住み、死を予知する猫オスカーの記録。若い医師と経験ある看護師の対話から、認知症患者と家族、終末期のあり方がよく描かれている。
49	汚染地帯からの報告	チェルノブイリ 救援調査団	今から25年前(1986)のチェルノブイリ原発事故。眼に見えない放射能、人を含むあらゆる生物と環境を蝕んでゆく。日本の原子力専門家と医師の救援調査団の記録。
50	がん 生と死の謎に挑む	立花 隆、NHKスペシャル取材班	膀胱がん治療後の、最多忙なジャーナリストのがん研究最前線レポート。「死ぬまで生きる力」があるという著者の死生観も語られ読み応えがある。
51	仰臥漫録	正岡 子規	35才で結核で亡くなった子規、死の前1年間の日記には、生への強烈な意思が記されている。同時期の「病牀六尺」とあわせて、近代俳句・短歌の改革者の想いを感じよう。
52	孤立死：あなたは大丈夫ですか?	吉田 太一	近頃、耳にする言葉に無縁社会・孤立死/孤独死がある。日本初の遺品整理会社を設立した著者がマンガや写真を交え、その実態と問題を分りやすく伝えている。

No.	書名	編著者名	一言コメント
53	こんなときどうする？：臨床のなかの問い	徳永 進	ホスピスケア可能な床診療所を開設した著者は赤十字病院にも勤務。情のあることを為すためには非情も必要と。同氏の「話し言葉の看護論」も読んで欲しい。
54	最後の授業 ぼくの命があるうちに	ランディ・パウシュ	がんで辞めなければならなくなったカーネギーメロン大学教授の最後の授業、メッセージは重い。アメリカのベストセラーだが、日本語訳はチョット。原著で読んでみる？
55	死と身体：コミュニケーションの磁場	内田 樹	人は死者とも対話するが、万語費やしても無意味な(ケタイ)対話もある。主題とされるが、意外に多い「おさま思想」対策本、同氏のベストセラー『日本辺境論』もあわせて。
56	死ぬ権利：カレン・クインラン事件と生命倫理の転回	香川 知晶	機械的に維持される生命の最期は、誰が、何時、どう決定するのか？有名なカレン・クインラン事件の裁判(1975)の検証書。法律用語も多く難しいが一読を。
57	「社会的入院」の研究：高齢者医療最大の病理にいかに対処すべきか	印南 一路	医学的には必要がないのに、家庭の事情などで病院で生活することを社会的入院という。本書は、その実態と要因を明らかにし、可能な対策を提起している。
58	沈黙の壁：語られることのない医療ミスの実像	ローズマリー・ギブソン、 ジャーナルダン・ブラッド・シン	防ぎうるミスによる患者の死。病院のカーテンの間に潜む事実を光をあてた本書は、掛替えのない生活資産である医療が時に悲劇を生むことを冷酷に告げる。
59	脳障害を生きる人びと：脳治療の最前線	中村 尚樹	近年の発達著しいが、今も脳は自然科学分野最大の未知領域。本書は、脳をめぐる疾患や障害の実態、問題を事例をもとに詳細に判りやすく記載しており、賢くなります。
60	脳と人間：大人のための精神病理学	計見 一雄	精神科医生活30年以上の著者が、豊富な臨床事例をもとに精神分裂病と脳の関係を説明。哲学的な分析や充実した参考文献も一読の価値あります。
61	ハーフ・ザ・スカイ：彼女たちが世界の希望に変わるまで	ニコラス・D. クリストフ、 ジェリル・ウーダン	人身売買、強姦・強制売春、性差別と暴力。女性への想像を絶する残虐行為を記した書だが、決してどこかの話ではない。あなたの身近にも起こっていると思って。
62	ひとりぼっちのゾーン：最後のガラパゴスゾウガメからの伝言	ヘンリー・ニコルズ	「ロンサム(ひとりぼっちの)ジョージ」は、ガラパゴス諸島ピンタ島で発見された絶滅したと思われていたゾウガメ亜種の最後の一頭。ある種の生物の消滅と環境を考えさせられる。
63	人はいつか死ぬものだから：これからの終末期ケアを考える	ポーリーン・W. チェン	十数年の臨床経験を通じて本当に必要な医療とは何かと葛藤する医師が描いたノンフィクション。人の命を救うといいながら、病院の仕事は死に取り囲まれているという。
64	ヒトはどのようにしてつくられたか	山極 寿一	生物学的には化石という証拠はあるが、ヒトの特性「社会性」の化石はない。ヒトとは何か。多分野の学者が「人間=ヒトとは？」を探求するシリーズの第1弾。難しいけど面白い。
65	ヒトはなぜ病気になるのか	長谷川 眞理子	人類学・行動生態学専門家が、人間の進化過程から病気を解説。検査で正常とか異常という、通常の医学的評価でない進化生物学的な健康と病気の解説。
66	100歳の美しい脳：アルツハイマー病解明に手をさしのべた修道女たち	デヴィッド・スノウドン	比較的生活環境を同じくする修道女678人を対象に、脳機能、老化を多角的に研究した報告。アルツハイマー病を防ぎ、健康な長寿をまっとうするヒトは若かりし頃にある？
67	ビルマ従軍看護婦の記録：南十字星の見える丘に立ちて	岩隈 フキヨ	あって欲しくないが、一読して欲しい従軍看護婦の記録。戦争の実態、犠牲者の看護に当たった先達のご苦労を、後継者としても国民としても風化させてはならない。
68	法医学者、死者と語る：解剖室で聴く異状死体、最期の声	岩瀬 博太郎	日本の不審死の90%は司法解剖されていないが、虐待や孤独死の遺体は自らの死で多くの深刻な警告を発しているとの著者の指摘をどう受ければいいのか？
69	無縁社会：“無縁死”三万二千人の衝撃	NHK「無縁社会プロジェクト」取材班	大きな反響を呼んだ同タイトルのNHK番組(2010.01)の取材メモを下に、放映されなかった部分も文書化されたもの。わが国の深刻な社会現象の実態を知ろう。
70	良い死	立岩 真也	人は、なぜ、尊厳死を良いとするのか。「生きたいなら生きられる」社会にするための、必要な道筋を探り、終末期医療をめぐる諸問題を考えさせる書。
71	夜と霧 新版	ヴィクトール・E・フランクル	悪名高いナチス強制収容所。極限の環境下に人間性を失わない人と破綻する人がいる。精神分析学者の記録だが、戦争文学の最高峰。10期生が本学「知識の扉」お勧め本に取り上げている。
72	臨死体験<上><下>	立花 隆	危ない経験を「死にかけた」というが、本書は真の生物学的死に踏み込みかけた多数例を科学的に考察している。脳・知覚・時間と生・死をめぐる興味深い話、恐ろしいかも。
73	わたしが死について語るなら	山折 哲雄	著名な宗教哲学者が、子ども向けに死を語った書。自身の戦争体験や日本の古典を題材に、日本人の死に対する姿勢をわかりやすく論じている。

◆◆◆ 小説 ◆◆◆

No.	書名	編著者名	一言コメント
74	赤ひげ診療譚	山本 周五郎	江戸中期の養生所、無骨な医師「赤ひげ」と見習い医員の物語。周五郎作品中、やっぱり、一番好き。「赤ひげ」は黒澤映画やドラマ以来、名医の代名詞となった。
75	アフリカの瞳	常木 蓬生	エイズと貧困が蔓延する南アの底辺の人々、その中で働き、現地の想いを共有する日本人医師。前作「アフリカの蹄」とあわせGlobal Healthの教科書のような小説です。
76	介護入門	モブ・ノリオ	祖母の在宅介護を主題にした芥川賞受賞作。ラップ調で、高齢の私は、ちょっと読みづかったが、若者は音楽同様一気読みが可能。介護の本質も判る。
77	KAGEROU	斎藤 智裕	人気俳優水嶋ヒロ(って誰?)作でなくとも面白い。自殺願望男に降ってきた臓器売買。今日的課題の中で命、人間の価値、愛を問うている。ホブラ社小説大賞受賞。
78	家庭の医学	レベッカ・ブラウン	マニュアル本のようなタイトルだが、がんの母の経過と死に至る看取りを感情を殺して書いてある。サラッと読めばすぐ終わるが、考え始めると前に進めなくなるほど重い。

No.	書名	編著者名	一言コメント
79	霓橋(げいきょう)の夢	珠下 なぎ	淡い虹を意味する「霓橋」をタイトルにした本書は心療内科医の小説。医療現場の対立、相互不信を描きつつ、他者との間に信頼の橋をかける願いが込められている。
80	ジーン・ワルツ	海堂 尊	続々新作を発表する売れっ子医師作家の作品をひとつ選ぶのは至難だが、少子高齢化なので、不妊治療など生殖医療を扱った医療ミステリーを選びました。勉強にもなる。
81	臓器農場	常木 蓬生	「無脳症児からの臓器移植」という、尖鋭かつ最先端の医療の間をテーマとする医学サスペンス。ヒロインは新任看護師。生命の重さをかみしめられるかな?
82	高瀬舟	森 鷗外	不治の病の弟は兄への迷惑を断つべく喉を切る。死にそこなった弟の望みで、結果として弟を「殺した」兄。高瀬舟の中で語られる安楽死は漱石と双璧の文豪の短編。
83	つるかめ助産院	小川 糸	突然消えた夫。まりあは南の島の何だかおかしな助産院院長に、予期せぬ妊娠だけでなくこころをケアされる。生と人生、看護の真髓が書かれた、ありそうな小説。
84	ノーフォールト	岡井 崇	現役産婦人科教授が、医のあるべき姿を求めて書かれた小説だが、圧倒的な筆力と物語の展開に一気に読み確実。現実の「事件」前の未来小説でもあった。

◆◆◆ ファンタジー、童話、絵本 ◆◆◆

No.	書名	編著者名	一言コメント
85	ある小さなスズメの記録：人を慰め、愛し、叱った、誇り高きクラレンスの生涯	クリア・キップス	第二次大戦下のロンドン、奇型スズメの雛を育て、唄の才能を発揮させた記録に過ぎない。が、知性ある著者の格調高い記載が美しい日本語になっている。お勧め度No1。
86	かのこちゃんとマドレーヌ夫人	万城目 学	動物と言葉やこころを共有する素敵な人々のファンタジー。小学生の「刎頸くフンケイの友」。どこかであったかもしれない、あって欲しい非日常に涙がこぼれました。
87	ことりとねこのものがたり	なかえ よしを	高所恐怖症!のネコとかごの中の小鳥の交流を描いた絵本。私のネコ本コレクションの一冊ですが、彼らから、思い遣りや勇気を学べます。言葉の調子が美しいお気に入りです。
88	さよならをいえるまで	マーガレット・ワイルド、フレヤ・ブラックウッド	事故がかけがえのない犬を奪う。現実を受容できない少年と優しい眼差で見守る父。動物であれ愛しいものとの別れがあると理解してゆく過程を描いた絵本、でも泣ける。
89	詩のこころを読む	茨木 のり子	一流の詩人による詩の世界のガイド。瑞々しい言葉に心が震える。誕生や恋愛、別れなどをテーマに、宝物のような詩が見つかる1冊。
90	ジュノー：絵本版	津谷 静子、enjin productions・UNION CHO	赤十字国際委員会駐日代表として敗戦近い日本に赴任、原爆投下直後のヒロシマに初めて大量医薬品を運んだスイス人医師。平和公園にその顕彰碑がある。人道とは?
91	少年の木：希望のものがたり	マイケル・フォアマン	争いで廃墟と化した街に若葉を見つけ、水をそそぎ続ける少年。その芽はやがて街に張られた鉄条網を覆い、子どもたちの集う木となる。平和を願う希望のものがたり。
92	のにつき：野日記	近藤 薫美	昔、私たちは自然の死を見ていた。小さな虫や生き物が死ぬとハエが飛んできて、やがて形が崩れ土に帰る。その上に草が生え花が咲くこと。そんな当たり前のお話ですが・・・
93	葉っぱのフレディ：いのちの旅	レオ・バスカリア	哲学者レオ・バスカリアが「いのち」について描いた有名な絵本。大自然の息吹を人間の生命に重ね合わせ、美しい写真でわかりやすく語る。生と死を考えるきっかけになる。
94	100万回生きたねこ	佐野 洋子	100万回生き返った傲慢ねこが、関心を示さぬ白い野良猫によって、他者を想うことを知る。絵本です。が、愛とは何か、生きる意味と死を考える哲学書と違い、何度も読みます。
95	ファーディとおちば	ジュリア・ローリンソン、ティファニー・ピーク	子ぎつねファーディの友だちは一本の木。秋、色を変えた葉を散らしてゆく木を心配するいじらしさ。自然の中にはこんな、看まもりの関係もあるかも。絵も色も素晴らしい絵本。
96	ぼくにもそのあいをください	宮西 達也	人気の怪獣シリーズ第5話。力がある強者が1番と思っていた恐竜ティラノサウルス、ちっちゃなトリケラトプスにあって、愛は力に勝ると気づきます。幼児用絵本ですが、私は好きです。
97	めっきらもつきらどおんどん	長谷川 摂子、ふりや なな	主人公「かんた」が体験する異界と現実世界との行き来、深読みすれば臨死体験ともとれる?「おかあさん」と叫んで現実に戻ってくるのも興味深い。
98	ワイズ・ブラウンの詩の絵本	マーガレット・ワイズ・ブラウン、レナード・ワイスガード	自然や動物を謳う絵本。身近なことを、美しくよみつつ、生命への畏敬が謳われている、と思う。看護の実践の前に、この本の主題と「ことばのおんがく」を味わって欲しい。
99	わすれられないおくりもの	スーザン・バーレイ	物知りでかしく頼りにしていたアナグマさんの死。しかし、死は永遠の別れではなく、思い出という別のくさびで永遠に生き続けることを教えてくれる絵本。泣かずに読めない・・・
100	忘れても好きだよおばあちゃん!	ダグマー・H. ミュラー、フェレーナ・バルハウス	時々私が判らなくなるおばあちゃんはアルツハイマー病。孫の立場から、その人生を木にたとえ、病気やかかわり方を記している。が、病気解説本でなく、絵本としてお勧め。

特別推薦書

橋をかける：子供時代の読書の思い出	美智子皇后陛下	日本の知性が凝集されています。WHO時代、会議で訪問したベルギーで日本語TV放映を拝見し感動しました。1998年の第26回国際児童図書評議会でのビデオによる基調講演です。
-------------------	---------	---